

ニシンの群来を夢みて藻場造成中！

岩宇地区では今年春50年ぶりにニシンが大漁となり、浜は思いがけない自然の贈り物に活気づきました。また、6月には堀株海岸で30万匹のニシン稚魚が放流されました。これらのニシンが来春以降も浜にやってきて、産卵が確認されるかどうか期待が持たれます。

ところでニシンは、藻場の海藻(草)に産卵することが知られています。藻場とは、コンブやホンダワラ類(写真1)、スガモ(写真2)など、海藻(草)が生えている場所を言い、ニシンやハタハタなどが卵を産み付ける場所になる役割や、稚魚が成育する場所としての役割をもち、海の生態系にとって重要なものとされています。

しかし近年、磯焼けと呼ばれる現象で藻場が減少したため、帰ってきたニシンが産卵できるよう藻場を造成することが必要不可欠となっております。

そこで、泊村では泊村漁協が主体となり、ホンダワラ類の藻場を造成する試験を本年度から行っています。これには泊村役場、水産技術普及指導所と共に、原子力環境センター水産研究科も協力しています。



写真1 一面に広がるホンダワラ類の藻場(泊村)



写真2 海中で揺れるスガモ(泊村)

ホンダワラ類は、初夏に卵(植物の種子に相当します)ができますので、これをコンクリート板などの基質に付着させて生長させ、その後コンクリート板ごと移植することで藻場造成ができます。

6月19日に、6枚のコンクリート板にホンダワラの仲間のフシスジモクという海藻の卵を付着させ、泊村の栽培漁業センターで2ヶ月ほど生長させました。また、これとは別に3枚のコンクリート板を天然のフシスジモクが数多く生えている場所に置き、自然にこぼれおちる卵をコンクリート板に付着させて、そのまま自然環境の中で生長させました。2種類の方法のいずれでも、1cm程度の大きさに生長したフシスジモクをコンクリート板に多数付着させることができました(写真3)。

これらのコンクリート板を8月25日に堀株海岸に設置し(写真4)、約2ヶ月半後の11月6日に確認したところ、3cm程度になり、生長の良い個体では葉が数枚出ていました(写真5)。

今後春先までにどの程度生長するか、個体数の減少が無いかなどを把握し、大規模に藻場造成する場合の参考になるデータが得られる予定です。

藻場造成したホンダワラの藻場にニシンが産卵にやってくることを期待したいものです。



写真3 コンクリート板上で1cmほどになったフシスジモク



写真4 海中に設置したコンクリート板の様子



写真5 海に出して2ヶ月半後のフシスジモクの様子